—特集(虚血性脳血管障害—病態—
よりみた治療への展望)—

第4回公開シンポジウムを開催して

赫 彰郎*

日本医科大学内科学第2教室

Opening remarks at the fourth annual symposium of the Medical
Association of Nippon Medical School

Akiro Terashi*

The Second Department of Internal Medicine, Nippon Medical School

数年後に痴呆性老人や寝たきり老人の数は270万人になると推定されている。その主因として考えられているのが脳血管障害である。近年、脳血管障害は死因別死亡率の第3位となったが、高齢者の脳梗塞の発生率は横這状態である。そこで、ますます重要となってきたのが、脳血管障害急性期における適確な病態把握とその治療対策である。

近年、MRI、PET、SPECTを中心とした画像診断機器の進歩は著しく、脳血管障害の診断、病態解明には欠かせない機器となった。MRIでの一つのトピックスとしてあげられるのが脳の灌流状態を強調する撮影法 perfusion sensitive imaging (PSI) である。動物実験成績ではあるが、脳の灌流状態を知る有用な検査法として紹介された。脳血管性痴呆の病巣部位として重要視されているのが、白質病変である。そこで、MRI T2強調画像でみる側脳室前角周囲高信号域 PVH の存在と痴呆発現との関係を PET を用いた脳循環代謝面よりの検討が行われた。脳虚血により細胞死に到る過程には、種々の病態増悪因子の関与があり、その一つに活性酸素があげられる。池田助教授より、脳虚血障害における活性酸素の関与を臨床的事例より検討した報告があり、また、動物実験の段階では有効性が証明されている free radical scavenger の臨床的応用の可能性についての紹介もあった。

血管内皮由来拡張因子が一酸化窒素 (NO) であ

る事が発見されてより、NO に関する多くの研究が進められてきた。しかし、虚血性脳組織障害における NO の役割については保護作用を主張する報告、傷害作用を主張とする報告がみられるが、田中講師より、NO の薬理作用について自験例をまじえて詳細な報告があった。NO の臨床的応用については、多くの問題解決の必要性を痛感した。

虚血に対する興味ある細胞応答現象として、「虚血耐性現象」が、松本講師らのグループにより発見された。そこで、虚血耐性現象の解説と最近の新知見についての興味ある紹介があった。今後、脳血管障害の治療を考える上で、軽度の脳虚血というストレスに対する脳細胞応答現象のコントロールが重要視されるであろう。片山助教授からは虚血耐性現象の発生機序を脳代謝面より検討した成績についての報告があったが、虚血耐性現象が発現されるのは、エネルギー代謝障害が軽減されるのではなく、蛋白合成能やストレス蛋白の gene の誘導、転写に影響して発現するとの成績であった。一方、虚血侵襲時におけるアストログリア及びミクログリア等の変化に注目が集まってきた。小暮教授より、脳梗塞、選択的神経細胞死、虚血耐性時等3種類の脳虚血時における神経細胞の生死とグリア細胞との関係をみた報告があった。

以上、各演者より、現在、世界的にも最も注目を集めている諸問題についての新知見の発表が行われ、大変有意義なシンポジウムであった。

* 教授